

ジョルジュ・バタイユと『キンゼイ報告』

古永真一

本稿では、今や性科学の古典となった『キンゼイ報告』に対するジョルジュ・バタイユの解釈を足がかりに、性科学とバタイユ的なエロティシズムの相違を浮き彫りにすることで後者の特異性について考察する。バタイユは『キンゼイ報告』については『クリティック』誌において二度にわたって論じており、テクストは改変されて彼の主著『エロティシズム』に収録されているが、意外なことにバタイユ研究においてあまり顧みられることがない。他方、『キンゼイ報告』においても——この書物の性格からすればある意味で当然だが——バタイユに関する言及は無く、それどころか性科学に関する著作のなかでバタイユが取り上げられることはきわめて少ない。エロティシズムに関する著作ではバタイユの名前は散見されるが、どうやら性科学では考察の対象になりづらいようである。おそらくバタイユが性科学の対象となる性の領域を非科学的に、言い換えれば文学的に、ともすれば形而上学的に論じているように見えるからであろう。他方、性活動の総体を捉えようとするバタイユは、『キンゼイ報告』論も自らの著作に収録し、性活動をエロティシズムのテーマのもとに笑いや詩的言語と同列に考察しようとする。しかしこのようなアプローチは、キンゼイのような科学的な調査を重視する者からすれば理解しがたいものだったと想像される。逆に言えば、バタイユにとっても性科学の手法は首肯しがたい側面があるのだが、まずはそのあたりの経緯から簡単に触れておきたい。

バタイユと性科学の接点

バタイユと性科学の接点は、第二次世界大戦前にマルクス主義者のボリス・スヴァーリンが主宰していた民主・共産主義サークルでバタイユが活動していた時期まで遡る。機関誌『社会批評』にバタイユが発表した「消費の概念」(1933)は重要な論考であるが、本稿で着目したいのは同誌がマルクス主義だけでなく精神分析や社会問題に関するさまざまな著作を紹介する役割も果たしていたという事実である。マルクス主義と精神分析を総合しようとしたグループは、

フランクフルト学派だけではなくたのだ。同誌には、バタイユによるリヒャルト・フォン・クラフト=エヴィングの『変態性慾ノ心理』の書評や¹、ジャック・ペルデュやミシェル・レリスによるハブロック・エリスの著作の書評が紹介されている²。クラフト=エヴィングもハブロック・エリスも性科学を創始した代表的な人物である。また同誌には、フロイトの『幻想の未来』の仏訳の一面広告が掲載され、シュテファン・ツヴァイクのフロイト論やラカンのパラノイアに関する著作も紹介されている。同誌からは、バタイユが性科学の著作の仏訳が続々と紹介される現場に立ち会いつつ、自らの思想を練り上げていったことがうかがわれる。

こうした事実からもフロイトはバタイユ思想においても性科学においても重要な人物であるが、マルクス主義系の雑誌でさえ注目されていたことがわかる。周知のようにフロイトは、リビドーという無意識のエネルギーに基づいて理論化し、患者の治療のみならず芸術論から幸福論まで記し、愛と性についてさまざまな考察をめぐらした。精神分析の考えに立てば、肉親への情愛も、宗教心も愛国心も、芸術創作も猟奇的な性犯罪も、リビドー理論のもとに解釈することが可能である。フロイトによれば、無意識においては生の欲動たるエロスと死の欲動たるタナトスが拮抗しており、そのような無意識的な情動が集団心理のように伝染するとされるが、他方ではたしてこのような非合理的な情念や欲望についてどこまで科学的に考察することが可能なかという問題は、フロイト以降の精神分析にもつきまとうことになった。

フロイトがタナトスの思想を発表したほぼ同時期、ドイツでは「性のアインシュタイン³」と呼ばれていたマグナス・ヒルシュヘルトが性科学研究所を設立し、性について総合的な研究を構想していた⁴。しかしフロイトと同様にナチスドイツの弾圧の対象となり、ヒルシュヘルトの蔵書は焚書の憂き目にあい、改革運動は挫折を余儀なくされる。もともと性科学そのものは戦時中も戦争遂行の観点から重視され、例えば日本では工場で勤労奉仕する女性が月経のときに生産効率が落ちる事態に関する研究が為されている⁵。こうして性科学は第二次世界大戦によって下火になることはなく、富国強兵の観点から国家に奉仕すべく組み込まれたのだった。

『キンゼイ報告』の衝撃

戦後はいわゆる『キンゼイ報告』が出版され、全世界に衝撃が走った。『人間における男性の性行為』(1947)や『人間における女性の性行為』(1953)といったキンゼイたちの著作は、『キンゼイ報告』と呼ばれ、フランスや日本でもいち早く紹介された。性科学の古典として名をとどめてはいるが、おそらく現在の日本で実際に読む人は研究者以外ほとんどいないであろう。1950年に出た翻訳は、日本語としても読みづらく入手もしづらい。しかし2005年にキンゼイの半生を描いた映画「愛についてのキンゼイレポート」が日本でも公開され、キンゼイがあらためて注目を浴びることになった。

『キンゼイ報告』は、アメリカ人の性生活に関する膨大な調査書である。一万人を越えるアンケート結果をまとめ、当時としては最大規模の性に関する調査となった。報告書には夥しい図版にくわえ、アンケートにはSMプレイや猥姦などの嗜好を問う質問も含まれ、年齢や宗教、社会階層ごとの性癖について詳しく調査されている。男性回答者の三人に一人が男性同士のセックスの経験があると答え、女性の半数以上がマスターベーションをしているという調査結果は、当時としては衝撃的であったため、多大なる反響を巻き起こした。結局、アメリカ人の性の実態を白日の下にさらしたキンゼイは、各方面から批判を浴びることとなり、ロックフェラー財団からは研究費を打ち切られ、保守派や宗教団体からは「コミュニスト」だと非難されることになる。

『人間における男性の性行為』の原書は千頁を越える大著だが、日本では早くも二年後に翻訳されている。訳者を代表して、日本性教育協会会長だった永井潜は、キンゼイがアメリカで得た知見をそのまま日本に適用することはできないが、この名著の紹介が機縁となり、性科学勃興の気運が醸成され、新日本再建の基盤となることを心から祈ってやまないと冒頭に記している⁶。また共訳者で日本性科学会会長だった安藤画一も「食慾の行使に対する食衛生と同様に、性慾の行使に対しても、性衛生または性倫理の基準を示さねばならぬ。」⁷と序文に記し、「キンゼイ報告」はその質と量、調査方法において性科学的な成果となるものであって、性倫理の基準を示すものだと褒め称えている。こうした文章からは、敗戦から立ち直ろうとする日本人の学者の不屈の精神を感じさせるとともに、医学や統計学の科学性や性教育における道徳の重要性に照らし合わせて『キンゼイ報告』を評価していることがうかがわれる。

バタイユのキンゼイ解釈

ではバタイユは『キンゼイ報告』をどのように評価しているのだろうか⁸。バタイユは『キンゼイ報告』を性に関する革命的著作だとして次のように述べている。

「キンゼイ報告以前は、性生活は物の明晰判明な真実を最低限にしか持っていなかった。今やこの真実は、たいへん明瞭とまではゆかないが、かなり明瞭になっている。性活動を物のように語る事がとうとう可能になったのだ。これは、ある程度、キンゼイ報告がもたらした新事態なのである……。⁹」

これまで性生活はこれほど徹底的に調査されることはなく、『キンゼイ報告』のように人間の性活動を科学のデータのように扱うことはなかったとバタイユは言う。これには異論はあるかもしれないが、それだけ『キンゼイ報告』のインパクトがあったということであろう。重要なことは、全体としてバタイユがキンゼイとは真っ向から対立する立場から、性的な行為は事物のように扱うことはできないと主張しているということである。要するに『キンゼイ報告』が科学的で客観的な立場にたとうとするがゆえに明らかにできないとされる性の真実なるものをバタイユは問題化しているのだが、もしもキンゼイがバタイユの書評を読んだら、理解しがたいと思ったかもしれない。エロティズムをエネルギーの消尽という普遍経済学の問題として捉えるバタイユの理論を知りえたとしても、昆虫学の地道な研究から出発したキンゼイからすれば壮大な虚構にしか見えなかったと思われる。

バタイユのキンゼイに対する具体的な批判をひとつ挙げてみよう。キンゼイ報告では性行為の長さという要素が考慮されていないことをバタイユは批判している。エネルギー消費の観点からすると性行為の長さは重要であり、それは上流階級の特権に関わっているとバタイユは言う¹⁰。性行為の長さと上流階級の特権の関係とは、人間のエネルギー消費において労働の占める割合が社会の階級に関連すること、上流階級以外の人々にとっては、労働によって性生活が時間的に圧迫されていることを示している。興味深いのは、上流階級以外の人々のなかで、泥棒やギャングや詐欺師など「悪党」と呼ばれる人たちにバタ

イユが注目していることである。週7回以上の性交という高頻度の人の割合は、働いている人では10パーセントにすぎないが、悪党というカテゴリーにおいては49.4パーセントに達しており、そこからバタイユは悪党が労働による性に対する隷属から——少なくとも頻度というパラメーターにおいては——比較的免れていると考えている。堅気の勤め人に比べて「働かない」悪党は労働に回収されない性の横溢したエネルギーを存分に発散しているというわけだ。また、支配者階級たる「至高の階級とは、民衆の同意を得た幸福な悪党のことではないだろうか¹¹」と注に記しているのも意味深長であり、両者が労働と性の関係において同等のエネルギーを持ちながらも、支配者階級がそれを至高な形で蕩尽していないことを示唆している。

バタイユにとって性と労働は不可分の関係にある。というのも人間は労働によって外界を物の世界として秩序づけ、また人間自身もそうした物の世界で一個の物へと還元される。だがこのような操作は完全に為しうるものではなく、つまり人間は「性の横溢」と呼ばれる過剰な欲望を制御しきれものではなく、人間が去勢牛のように労働力や物に還元されることはありえないとバタイユは考える。明晰な意識によって形成される人間性が人を労働へ駆り立てるとすれば、そのような操作に抵抗する人間内部の動物性こそ「内的な誇り¹²」だとバタイユは述べているが、それがまさにバタイユ的な意味における真の人間性を表すものであり、エロティシズムをバタイユが重視した理由かと思われる。バタイユの考えからすれば、支配者階級は人間性に反するような労働による搾取を推し進めるのではなく、本来ならば人間性を解放する役目を引き受けなければならない。例えば封建社会において王が主宰する祝祭やカトリックの荘厳な宗教建築は、富を持たざる人々に対しても過剰の蕩尽による至高の輝きを放つ威力があったと思われる。現代の支配者階級はそうした普遍経済的な役割を引き受けず、被支配階級に対しては勤勉と消費という資本主義のエートスを浸透させようとしつつ、自らはひたすら富の蓄積と増殖に邁進している限定経済学的な事態に対して、バタイユは危機感を抱いている¹³。

このように労働と消費の関係性が歴史的に変質してきており、そうした変化が性的な活動にまで影響を及ぼしているとバタイユは『キンゼイ報告』から読み取るのだが、だからといって労働時間を短縮すれば性生活が充実し人間らしい社会が到来するとバタイユは楽観的に考えているわけではあるまい。とりわけ第二次世界大戦後は、戦前のような政治活動に身を投じることもなくなり、

戦後のバタイユは『クリティック』誌の編集のような出版や執筆に熱心に取り組み、変わりゆく世界に対して以前よりも地道な思考を展開していったという印象がある。

戦後になってもバタイユが変わらなかった点といえば、エロティシズムのような体験自体を考え抜こうとしたこと、その体験の内実はキンゼイのような客観的な調査では捉えられないと考えたことである。こうしたエロティシズムの体験の重視は、これまではもっぱら文学や美術のテーマとなってきたが、バタイユは『エロティシズム』にみられるように、サドの小説もレヴィ=ストロースの文化人類学も、キリスト教の神秘思想も哲学も性科学も含めて総合的に論じようとする。その野心的なアプローチゆえであろうか、一般的にセクシュアリティに関する著作のなかでフロイトやフーコーに対する言及は多いが、バタイユに対する言及は少ないように見受けられる。バタイユが性科学の研究領域を批判的に捉え、エロティシズムの体験自体を聖なるものや神秘体験と結びつけながら哲学的に論じるためであろう¹⁴。

既に触れたように、『キンゼイ報告』に対するバタイユの解釈において鍵となるのは労働の概念である。人は労働によって合理的な価値判断を重んじる「人間」となるのだが、それと同時に労働に解消しえない過剰も内部に抱え込む。バタイユにおいてエロティシズムはこの過剰が華々しく蕩尽される重要な契機の一つであるが、裏を返せばエロティシズムは労働との関係において把握すべきものだということだ。バタイユ的に観点からすれば、ヘーゲルやマルクスも労働を重視した思想家であるが、労働の人間の面や逆に人間性を疎外する否定的側面から労働を論じるのではなく、バタイユは過剰の蕩尽としてエロティシズムの問題を中心に据えたのだった。

精神分析をマルクス主義と結びつけつつ、性的な満足感を治療の根幹に据えようとしたヴィルヘルム・ライヒも一見するとこのようなエロティシズムの思想に関係があるように見えるが、オルガスムスを重視しすぎるあまり、オルゴン・エネルギーといった神秘的なエネルギーを想定し、ついには奇天烈な機材まで開発するといった怪しげな疑似科学的な方向に突き進んだ点で、バタイユのエロティシズムの理論とは区別する必要がある¹⁵。労働の桎梏とそれに伴う過剰の蕩尽のうえに成立するバタイユのエロティシズムが孕む問題は、ライヒ的な「性の革命」によって解決することはできない。『クリティック』に発表するさいにバタイユがライヒではなくキンゼイの著作に対して「性の革命」と

いう表現を題名に盛り込んでいるのは、キンゼイのチームが統計学的手法を徹底させることで性に関する知られざる面を明らかにしようとしたからであって、その詳細なデータが開示し得ない真実こそ、バタイユがエロティシズムの本質に関わるとみなしたからだった。そもそもライヒ的なフリーセックスの理論は、禁止の侵犯を重視するバタイユのエロティシズム理論とは矛盾する。バタイユがエロティシズムの本質に禁止の侵犯をみてとるのは、労働によって深化した意識が性の横溢という内的な過剰を否定しながらも、それが使い道のない否定性として有用性の論理を裏切る契機を内包しているからである。だが、そうした過剰が労働に集約されるエートスによって一元的に管理されていく事態が進行すれば、エロティシズムが人間存在にとって性の横溢によってはからずとも開示される認識——バタイユが「内的な生の諸真実」と呼ぶもの——は閉ざされていくことになる。

バタイユが『キンゼイ報告』の徹底的な調査に圧倒されつつもそこから読み取ったのは、そのような調査方法では明らかにしえないエロティシズムという他者と分有される「内的な生」の存在であった。そこでバタイユはリュシアン・レヴィイ＝ブリュールの「融即¹⁶」という用語を使って、キンゼイのような客観的認識では捉えられない性の様相を説明しようと試みている。「融即」とは「未開人」の心性が「文明人」の論理的思考と異質であることを示すために、レヴィイ＝ブリュールが導入した概念である¹⁷。「文明人」は科学的思考によって区別して分析するのに対し、「未開人」は区別せずに同一化し結合するという「前論理」的な思考を実践する。バタイユは、融即という言葉で性的な興奮、笑い、欠伸、詩的言語を結びつけるのだが、共通するのは伝染性が強く、科学的思考では捉えがたい働きだということである。キンゼイは膨大な労力を結集してアメリカ人の性生活のデータを集めたが、はたして笑いやポエジーのデータも集めなければならないということであろうか。もちろんそのようなデータを集めるのが必要だとバタイユは言っているわけではなく、性行為が身体を介したコミュニケーションであるならば、笑いやポエジーも含めたもっと大きなパースペクティブのなかで性行為やエロティシズムを考えることが重要だとバタイユは示そうとしたのである。

¹ *Critique sociale, 1931-1934, La Différence*, 1985, p.123. 本稿で参照しているこれ以外のバタイユのフランス語のテキストは、ガリマール社のバタイユ全集に依拠している。Georges Bataille, *Oeuvres complètes*, Gallimard, 1970-1988. なおクラフト＝エヴィングの著作に関するバタイユの書評については、同グループでバタイユと対立していたジャン・ベルニエのテキストとともに、2011年『水声通信』34号の『『社会批評』のジョルジュ・バタイユ』特集において高桑和巳氏によって訳出され、同号に収録されている丸山真幸氏の「倒錯は正しい」と題された論考で興味深い考察がなされている。

² ハブロック・エリスの『売春——その原因と治療』と『社会における女性』の仏訳に対するジャック・ペルデュの書評(*Critique sociale*, pp.41-42.)と、『性の心理学的研究』に収録されたエリスの仏訳の論考「愛の技術」「生殖の科学」「性的逸脱のメカニズム」「ナルシズム」に対するミシェル・レリスの書評(*Ibid.*, pp.252-253.)が同誌に掲載されている。

³ ヒルシュヘルトは性改革のための世界大会を組織し、メディアからも注目されそのような別称を賜ることとなった。同性愛が法的に犯罪とされていたドイツにあって、同性愛者の権利を擁護すべく、1897年に彼が仲間と立ち上げた科学人道委員会には、かのアインシュタインも名を連ねており、2001年には『性のアインシュタイン』というドキュメンタリー映画が制作された。

⁴ ヒルシュヘルトの『戦争と性』は世界性学全集全十二巻のうちの第五巻として1956年に河出書房から高山洋吉の訳で出版されており、軍隊と性生活の問題を考えるうえで貴重な文献となっている。

⁵ 片山杜秀、『未完のファシズム』、新潮選書、2012年、315～323頁。同書に

おいては日本の産業心理学の開拓者である桐原葆^{しげみ}見が戦時中に出版した『月経と作業能力』(1943)が取り上げられ、月経のときに仕事や勉強を普段通りやれるかどうかについてアンケート調査が2411人に実施され、女性も精神的に陶冶され錬成されれば男性と勝るとも劣らず働ける筈だという議論に対して、精神主義でむやみに女性の作業能力を高めようとはならず、月経の周期を乱さないことこそ「真のナショナリズム」だという内容が紹介されている。

6 A.C.キンゼイ、W.B.ポメロイ[ほか]著、『人間に於ける男性の性行為』(永井潜他訳)上巻、コスモポリタン社、1949年、11頁。

7 前掲書、14頁。

8 ガリマール版全集、第十巻、pp.149-163. 初出『クリティック』第26号、1948年7月、pp.646-652. 第27号、1948年8月、pp.739-750. タイトルとして「性の革命とキンゼイ報告——アルフレッド・C・キンゼイ、ワーデル・B・ポメロイ、クライド・E・マルタンの『人間の男性における性行動』について」。『エロティシズム』(酒井健訳、ちくま学芸文庫、2004年)に収録するにあたっては、「キンゼイ報告、悪党と労働」と題され、主として後半の論考が取り入れられている。本稿ではこの『エロティシズム』のテキストを主に参照した。

9 『エロティシズム』、256頁～257頁。

10 『エロティシズム』、271頁。

11 『エロティシズム』、482頁。

12 『エロティシズム』、267頁。「私たちは、まさしく内的な誇りを持っているからこそ、去勢牛のように労働力に、道具に、物に、還元されることがないのである。人間性——動物性とは反対の意味での——のなかには、物と労働に還元されない要素が間違いなく存在する。」

13 普遍経済と限定経済の差異についてはバタイユの『呪われた部分』(生田耕作訳、二見書房、1973年)などの著作を参照されたい。ちなみにバタイユが『キンゼイ報告』を論じた『クリティック』第26号、第27号の後で第29号において「戦争の終結に向けて——フランソワ・ペルーのマーシャル・プラン」という論考を発表しているのは、バタイユのエコノミーという主題に関心を抱き続けていたことを示している。フランソワ・ペルーは『クリティック』の寄稿者でもあり、バタイユに経済学について何らかの影響を及ぼしたことは想像に難くない。また第20号では「ソヴィエトの産業化の意味」、第21号の「実存主義から経済の優位へ」、第23号の「実践倫理と資本主義」といった論考も、初期の重要な論考「消費の概念」から続く当時のバタイユならではのエコノミーへの関心の深さを裏付けている。

14 例えば鎮目恭夫の『性科学論』(みすず書房、1975年)においては、性について考えるさいは「遊び」と「笑い」も重要であるとして、ロジェ・カイヨワやマルセル・パニョルの著作が参照されている。こうした問題設定はバタイユにこそ一貫してみられるものであり、本来ならば参照されてしかるべきである。ちなみに『性科学大事典』(西村書店、1985年)やセクシュアリティの概説書(例えば Véronique Mottier, *Sexuality A Very Short Introduction*, Oxford University Press, 2008.)においても、バタイユに対する言及はみられない。

15 ライヒの記述については以下の著作を参照。マイロン・シャラフ、『ウィル

ヘルム・ライヒ―生涯と業績』上下巻(村本詔司、国永史子訳)、新水社、1996年。

16 原語は **participation** だが、この語はプラトン哲学では個々の事物がアイデアにあずかっている「分有」を意味し、心理学においては原始的ないし幼児的思考を指す言葉である。バタイユはレヴィ＝ブリュールの「融即」という言葉を、主体・客体の図式では捉えきれない、内面的要素による交流という共有的思考を指すものとして使用している。

17 レヴィ・ブリュール、『未開社会の思惟』上下巻(山田吉彦訳)、岩波文庫、1953年。